

愛知大学に電子図書館は訪れるか？

法学部教授 中尾 浩



今年（2010年）に入って電子書籍や電子図書館などの話題が以前にも増して賑やかになってきた。肯定派、否定派、各人各様の考えがあるだろう。大学という職場で働

いている以上、書籍と無関係では教育も研究もできないので、今後どのように時代は動くか、愛知大学全体として、あるいは私個人として、どのように対応すべきか、といったことを考える機会が増えてきた。

個人的には、紙の書物には愛着がある。田舎の実家に帰ったときに、子どもの頃や学生

時代に読んだ本を手にとると、書物の手触り、重さ、古書独特の匂いなどが、当時のことをまざまざと思い出させてくれる。子どもの頃に書きなぐった落書きや、高校生の時の生意気な書き込みなどを見ると、自分のことながら微笑ましくなってくる。

そうしたことは、電子書籍には求めにくいだろう。確かに、技術的には書き込みしたり、それを何層にも重ね合わせる（つまり、読む度に新しく書き込みができる）など、おそらく今現在の技術でも不可能ではあるまい。しかし、電子書籍には基本的に手触りも重さも匂いもない。あるのは再生機器である携帯電話、

電子書籍リーダー、パソコンなどの手触りや重さであって、子どもの時に読んだ絵本も、高校生の時に読破した大河小説も、基本的には同じ再生機器の中の1ファイルに過ぎない。吉川英治の『新・平家物語』は紙の文庫本で24冊にもなる。これはすでに電子書籍化されていて、紙の文庫本と同じく24分冊ファイル全てを携帯電話に取り込むことなど簡単である。24冊の文庫本と携帯電話では一見したところ全く別物のように思えてしまうが、『新・平家物語』という書籍の中味は同じだ。

ここに重要なことがらが隠されている。我々は書物に物質性をどうしても求めてしまう。紙の書籍の場合、文庫本と全集の1冊では大きさも重さも違う。新刊書であるか、古書であるかといった違いなど、書物はさまざまな物質性や属性の集合体である。それは書物が物質である以上、しかたのないことであり、それを否定することは意味のないことかもしれない。ところが、電子書籍は、ゼロではないが、基本的に物質性を限りなく欠いている。もちろん、携帯電話で読むか、パソコンで読むかでは、重さも画面の広さも全く違うのだが、電子書籍の場合、その違いはあまり重要視されない（この問題が重要性を持つことについては別の機会に論じてみたいと思っている）。おそらく携帯電話で読むかパソコンで読むかの違いは既成事実として事前了解されているからだろう。つまり、電子書籍を読む場合、肯定派も否定派も、ある一つの真実を敏感に感じ取っている。電子書籍は（全く無縁ではないとはいえ）物質性から限りなく遠い、ほとんど「むき出しの情報そのもの」に過ぎない。かつて書物が持っていた、物質性や付随的属性がほとんど剥ぎ取られて、書物の中味、情報のみが自立している。

こうした事態は情報論的には、言語学者・記号学者のソシュールが述べた、実体的同一性と関係的同一性の概念と同じである。文庫本の『坊ちゃん』と全集の中の一冊の『坊ちゃん』では実体的な（物質的な）同一性は異なっている。しかし、夏目漱石の一作品という関係

論的な観点からいえば、文庫本であろうが全集の中の一冊であろうが同一である。従って、携帯電話で読もうが文庫本で読もうが、『坊ちゃん』は『坊ちゃん』である。文庫本で読んだ『坊ちゃん』には感動できたが、携帯電話で読んだ『坊ちゃん』では、感動できなかった、というのは、読書人の感情としては理解できなくはないが、根本的に書物を誤解していると言わざるを得ない。書物の第一の機能は、身も蓋もない言い方になるが「情報を運ぶこと」に他ならない。我々は紙に印刷されたものだけでなく、石に刻み込まれたものにも、羊の皮をなめしたものに書かれたものにも感動してきたし、それらから多くの情報を得てきた。もしかしたら、過去には、薄っぺらい紙に書かれたものは駄目だ。石に刻み込まれた詩でなければ味わいがいい、などというつぶやきがあったかもしれない。新しい媒体が出てくるときには必ずそのような軋轢がある。しかし、人類は媒体の方ではなく、情報の方を選択してきた。もし媒体の方を選んでいたら、今ごろ我々の身の回りは石だらけになっていたかもしれない。



ロゼッタストーン(注1)

紙幅も限られているので、結論から書けば、遠からず、愛知大学にも電子図書館の波は訪れる。10年後には（あるいはもっと早い時期に）、図書館に納入される新刊書の大半は電子版で、学生も教員も携帯電話や電子書籍リー

ダーに取り込んで、貸出期限後には自動的に再生機器から消滅する、といった貸出方法になるかもしれない。何とも味気ない話だが、返却忘れはなくなるし、契約内容次第では、返却を待つ必要がなくなる、図書館の収納場所も大幅に縮小できる等といった利点もある。



Apple社のiPad(注2)

授業の形態も変わってくるだろう。たとえば今までなら授業中に学生に何かを調べさせたいときに、わざわざ図書館に行くのはあらかじめそのように予定していなければ、50人の学生をいきなり図書館に連れて行って、そこで何かを調べさせるということは難しかった。しかし、電子書籍になってしまえば、教室でいくらかでも調べることができる。辞書も教科書も電子化されてしまえば、教科書は持ってきたけれど、辞書や六法を忘れた、といったこともなくなるだろう。電子書籍リーダーさえ忘れたら？大学に来ても意味がないので、逆に忘れ物が減るのではないかと期待している。出席機能（もちろん、遅刻・早退も確認する）もつければ、学生の授業出席を促すかもしれない。電子書籍や電子図書館には欠点もあるだろうが、長所も多いと思われる。

しかし、何もかも電子化すればよいとは思えない。書物はおそらく大半が電子化されるだろうが、学生は授業中にパソコン等に授業

内容を入力することになるだろうか？それは教育上、決して有益ではないと思われる。教科書や辞書は情報を得るためのものである。それらが紙媒体であろうが、電子媒体であろうが、情報を運ぶといった本質的な役割は変わらない。しかし、授業の内容をノートする、メモする、というのは速記録を作ることではない。授業の内容を咀嚼し、理解することが目的だから、逆に今まで通り、紙のノートに自筆で書く方が教育効果は高いのではないかと現時点では思われる。もちろん、画期的な技術が生まれる可能性はあるので、自筆ノートが未来永劫よいわけではない。手書き入力の使いやすさもさらに進化することだろう。

大学は今後、否応なく、さらなる電子化を迫られる。そのときに忘れてはならないのは、教育の理念や大学の本質である。学ぶとは何か、教えるとは何か、教養や知識とは何か、といったことがらをさらに深く考える必要がある。それを忘れて、単に何でも電子化しさえすればよいというのはあまりに短絡的だ。電子化を拒んで、社会の動きからかけ離れてしまうのも問題である。基盤は整備されてきたし、黒船も到来した。大学も社会もこれから先、多くの変化に取り組む必要がある。そのときに、本質的に重要なことを見失わないように、変化に立ち向かっていくことが重要で、電子書籍や電子図書館の衝撃は、今すぐにでも取り組むべき課題になったと言えるだろう。

注1：大英博物館のWebサイトより
<http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/image.aspx?image=an16456b.jpg&retpage=15633>

注2：Apple社のサイトより
<http://www.apple.com/jp/ipad/apps-for-ipad/>